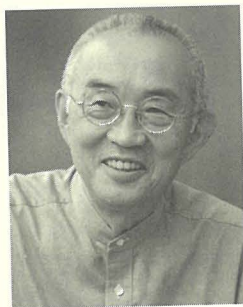


寡黙な自然の偉大な恩恵を見直す

東京大学名誉教授
つきおよしお
月尾嘉男



消滅寸前であった釧路湿原

毎年何度か釧路湿原の内部をカヌーで航行するが、船上から見渡すかぎり、人間の痕跡のない雄大な自然が現代にまで存続してきたことに心底感謝する気持ちになるほど、得難い光景である。ところが現在では想像もできないことであるが、この湿原全体を干拓して、工業用地や農業用地に転換しようという構想が検討

されたことがある。それは江戸時代とか明治時代というはるかな過去ではなく、わずか数十年前のことである。

一九七二年夏に第六代内閣総理大臣に就任した田中角栄首相は、就任直前に総理大臣として実施する政策として、日本列島全体を改造するという壮大な構想を発表した。全国に高速鉄道、高速道路、高速通信のネットワークを整備し、各地に産業

の拠点を建設して日本全体を格差なく発展させるといふ計画である。この構想は経済成長を待望していた国民、とりわけ地方の住民に熱狂をもつて歓迎され、日本列島改造は一大

流行となった。

その改造計画の一環として構想されたのが釧路湿原干拓計画である。現在であれば批判が集中して一気に消滅するであろう構想は、経済分野の人々からは支持され、実現の方向で検討された。しかし採算が困難という経済の理由とともに、干拓計画を危惧した環境保護を主張する人々が釧路湿原をラムサール条約に登録し、国立公園に指定されるよう努力をし、日本最大の湿原として現在に存続することになったというのが経緯である。

自然がもたらす巨大な価値

地域の一部の人々からにせよ、釧路湿原の干拓が支持された背景には、産業活動に利用できない広大な湿原が地域の中央に存在するため、地域が分断されているうえに、一帯が寒冷になり、頻繁に濃霧が発生し、発展の障害になっていると理解されていたという理由がある。経済もしくは金銭の視点からは一見妥当な見解のようである。しかし、その経済の視点からさえ、湿原をはじめと

する自然には膨大な価値があるという理論が登場してきた。

自然には目先の金銭では推測できない利益があり、それを自然環境がもたらす恩恵として、エコ・システム・サービスと命名し、様々な立場の人々にも理解できるように、その恩恵を金銭に換算するという理論である。一例として、上流地域が大雨であつても下流の湿原が保留して洪水を防止する、湿原内部には様々な鳥獣が生存し環境を多様にする、さらには観光に役立つなどという恩恵であり、これを金銭に換算するのである。

その換算の技法は省略するが、計算結果の一例を紹介すると、一ヘクタールの自然が年間にもたらす恩恵は、湿原が約一五〇万円、湖沼が八五万円、海岸が四〇万円、森林が一〇万円などであり、農地は作物の収穫を算入しても一百万円弱でしかない。釧路湿原の面積は二万ヘクタールほどであるから、地域に年間三〇〇億円強の価値をもたらしている計算になる。もし、干拓して農地に転換すれば価値は二億円弱と激減する。

未来から現在を予測する

そこで計算された単価に地球に存在する湿原、湖沼、海岸、森林などの面積を掛算すると、自然のエコ・システム・サービスの合計は三三〇〇兆円を上回る数値になる。二〇〇七年度の世界全体の国内生産総額は五二〇兆円程度であるから、その六割以上の恩恵を寡黙な自然は地球そして人類にもたらしていることになる。経済至上主義の時代には、このような自然の価値が評価されなかったが、その結果が現在の地球規模の環境問題である。

現代の人間は子孫の財産を先食いしているといわれる。そこで最近、バックキャストイングという言葉が登場してきた。現在から未来を予測することはフォアキャストイングであるが、バックキャストイングは期待すべき未来から現在の行動を想定することである。湿原を干拓するという行動は現在の人間の利益を優先したものであるが、子孫を優先すれば、そのような計画は構想さえされなかつたはずである。